全海運所属組合の横顔

連載　第 11 回

中国地方海運組合連合会

その 5　似島地区海運組合

【似島地区海運組合の概要】

事　務　局　〒 734-0017　広島県広島市南区似島町字家下 327 番地
電話 082-259-2325　FAX 082-259-2325
宇品港より似島フェリー乗船 20 分

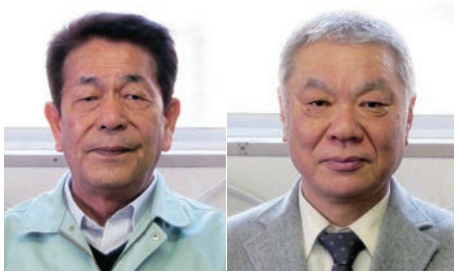
理　事　長　吉本　周次　㈲ 吉栄産業 代表取締役社長

事 務 局 長　廣延（ひろのべ）　春雄　専務理事

事務局員数　男子 1 名（事務局長含む）

組 合 員 数　登録運送事業者　13 社
登録貸渡事業者　4 社
合　計　17 社

所属船腹量　貨物船　17 隻　24,114 重量ﾄﾝ
プッシャー　6 隻　4,890 馬力
バージ　6 隻　6.385 重量ﾄﾝ
合　計　29 隻　35,389 重量ﾄﾝ



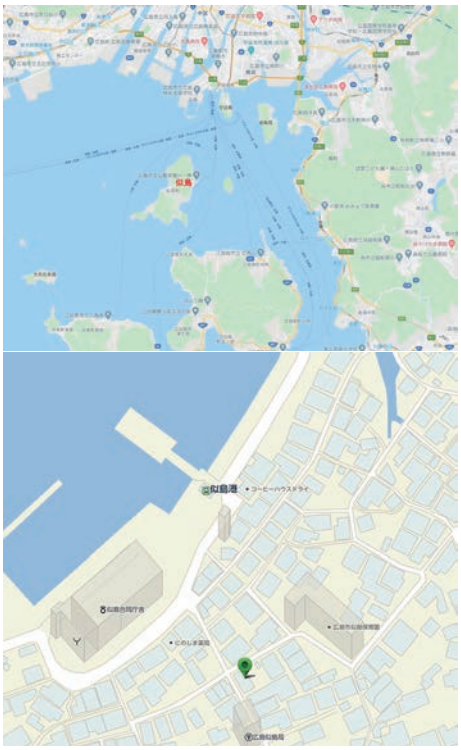
吉本理事長（左）と廣延専務理事

【地区の歴史】

似島地区海運組合は広島県下の海運組合中で唯一、創設以来今日まで統合することなく歩んで来たが、中国地方海運組合連合会傘下地区組合でみても、独自の歴史を辿ったのは、隠岐地区海運組合と似島地区海運組合の 2 組合だけである。それは歴史的にみても、似島地区海運組合の所属全船が創設以来、砂利採取運搬船（ガット船）に特化しているという事情にもよる。

似島は広島市南区に属し西に宮島、南に江田島を隔てた宇品港の沖に浮かぶ小離島である。県史には、江戸時代に荷継ぎの港として栄えたことから「荷の島」とされたとあるが、広島湾が遠浅で大型船が入港出来なかったところから一旦似島に荷降しし、小舟で本土に運んでいたことからつけられた名称でもあるとされている。古い文献では「二の島」「見の島」「似の嶋」「箕の島」の表記もみられるが、のちに「富士山に似た山のある島」から「似島」が定着した。

地元の貨物は砂・砂利以外に皆無で、立地的には現在



似島の位置（上）と似島地区海運組合

の砂利船の発生史的な条件を備えているといってよい。

似島は、広島藩の５代藩主浅野吉長（元和元年～宝暦２年＝1881～1752）が創立した藩校「講学所」を起源とする広島県の名門・修道学園の校歌にも、「安芸の小富士にあかねさし～」「宇品の海に射す月の真澄の／影の漂えば／流光遠く島淡く～」と謳われている。また、広島市の中区富士見町は、この安芸小富士がきれいにみえるところから、その名がついたとされている。校歌や町名に示す通り、広島湾宇品港から目の前に浮かぶ似島は、島の象徴である安芸小富士と呼ばれる標高 203 mの小山を中心に、北北東から南南西にかけておよそ 3.5km、狭まった中央部で東西約 1km、面積 3.96㎢の小島。島の外周は約 16km、沿岸部を一周する道路は延長約 10km ほどである。また、中央部の峠には標高 45 mの東西を結ぶ道路があり、海岸線は北が単調であるのに対して、南は２つの小半島に枝分かれし、浅い入江をつくっている。島には平地が少なく、山がちな地形である。

宇品港沖に浮かぶ似島の安芸小富士

似島は江戸時代から昭和４年（1929）まで、広島湾に面する堀越、向洋、淵崎、本浦、大河、丹那、日宇那の陸部と島嶼部の金輪島、峠島、大小珈玖摩島、安堂島とで安芸郡仁保島村（大正６年＝1917＝仁保村に改称）を構成していたと記録されている。仁保村は昭和４年、広島市に編入合併されてから仁保町になったが、合併当時も似島は仁保町の一部であり、「似島町」として実際に分離独立したのは、昭和８年（1933）12 月の「土地の名称及び区域の変更」によるものだった。だが、広島市に併合されているため、「離島としての補助を受けることが出来ない」のが難点と地元でいわれている。

地元の歴史を記した『仁保村志』によれば、似島には元文５年（1740）、似島竈（かまど）神社（通称・荒（こう）神社）が勧請されたと記録されており、明治 10 年（1877）には似島尋常小学校が設置されているので、既にこの頃には相当数の住民が定着していたとみられ、昭和初期の段階で農業が住民生活の生計維持に貢献していたことも記されている。また、明治 37～38 年（1904～1905）の日露戦争では、似島から御用船を出した記録も残されている。

似島の人々は、古くから市街地への往来や農漁業生産物の出荷などに、小船を利用していたが、そのかたわら広島湾内に係留された大中貨客帆船の艀作業にも従事していたようである。似島周辺は元々、旧広島藩の係船地であったが、明治 27 年（1894）に日清戦争が始まると当時、幹線鉄道の西の起点であった広島市が兵員・武器輸送の根拠地となり、それらを輸送船に移送するため、約 300 艘の艀が徴用されたとされる。

似島の東岸には、明治 28 年（1895）に日清戦争（明治 27～28 年＝1894～1895）から帰還の人馬のため、大日本帝国陸軍により似島検疫所が開設されている。日清戦争勃発当時、東京駅を起点とする鉄道網の西端が広島だったことから、大型船の運用が出来る港である宇品港を擁する広島市内に広島大本営が置かれ、宇品港が出征兵士や輸送物資のための兵站基地となっていた。この頃、戦地ではコレラや腸チフスなどの伝染病が流行し、日清戦争末期から終戦後にか

似島の町並み（上）と似島合同庁舎

けて兵士や軍用馬が凱旋帰国すると、広島県内でもこれが蔓延。当時大本営参謀総長であった有栖川宮熾仁親王が広島で発症した腸チフスにより薨去される事態にも及んだ。このため広島では、陸軍による市街地の徹底消毒や近代上下水道敷設などの対策がとられ、宇品には上水を送る広島軍用水道も敷設される一方、似島に帰還兵や軍用馬に対する伝染病の検疫・消毒のための検疫所が創設されたのだった。これが似島検疫所の祖となった臨時陸軍似島検疫所だが、似島がその地に選ばれたのは、宇品港のすぐ沖に位置していたことからだった。このとき検疫所は彦島（下関市）と桜島（大阪市）にも設置されているが、似島検疫所は当時、世界最大級の検疫施設で、海外からも評価が高かった。

日清戦争で出兵した旧宇品港軍用桟橋（上）と陸軍船舶部司令部跡の碑

その後の日露戦争下では、日清戦争以上の傷病兵が出たことから、海軍・陸軍ともにここで検疫をすることとなり、施設がさらに整備され、明治 39 年（1906）には陸軍船舶指令部（通称・暁部隊）の管轄となった。暁部隊は、大小問わず内航船を軒並み船員ごと徴用して行くので、瀬戸内船主から蛇蝎の如く恐れられていたという。

また、明治 38 年（1905）には似島に、ロシア人捕虜を収容するための俘虜収容所が設けられたが、これは捕虜を検疫後に収容するためだったとされている。さらに第 1 次世界大戦下では、大阪にあったドイツ兵捕虜収容所が手狭となったことから似島に施設を移転。ドイツ兵捕虜の一部は、ハーグ陸戦条約である程度の自由が認められていたことから、似島で日本の文化に多大の影響を与えている。カール・ユーハイムのバームクーヘン、ヘルマン・ウォルシュケのソーセージとホットドックの他、カール・F・グラーザーらが似島で根付かせて広島県下で盛んになったサッカーなどがそれである。特にバームクーヘンはその後、神戸でユーハイムが製造販売して大ヒットしたものの、似島が発祥の地とされている。

第 2 次世界大戦末期は帰還兵が減少したことから似島の検疫業務がほぼなくなり、検疫所は陸軍兵器補給廠似島弾薬庫、陸軍運輸部似島倉庫、陸軍船舶司令部所属船舶防疫部及び船舶衛生隊駐屯所となったが、昭和 20 年（1945）8 月の広島市への原子爆弾投下の際には、被爆者の臨時救護所として当てられた。似島が爆心地から海を隔てて島の北端で 8.3km、南端で 11.5km の地理的条件にあったことから、市内の病院が壊滅した中で似島検疫所は、被爆者救済のために重要な役割を果たしたのだった。しかし、検疫所に運び込まれた被爆者は 20 日間で 1 万人ともいわれ、島では遺体があふれ返って火葬が追いつかず、防空壕に入れたり空き地に埋葬されたりしたともされている。

似島の深浦地区には第 2 次世界大戦下、陸軍船舶部の秘密部隊である陸軍船舶練習部第 10 教育隊、別名・陸軍海上挺進船隊の訓練基地もあった。本部基地を江田島・幸の浦とするこの部隊は、ベニア板で造った舟に自動車エンジンを装備した水上特別攻撃挺「マルレ」に、250kg の爆雷を積載して時速 24㌔で敵艦に突撃する正に海の特攻隊だった。似島検疫所の付近には、米軍の空爆から守るためにマルレを格納した場所も、のちに明らかにされている。隊員のほとんどは、旧制中学 3 年修了以上の志願兵で構成

原爆被災者を埋葬した似島の慰霊の広場

された15歳から20歳までの非常に若い船舶特別幹部候補生だったが、全国各地の部隊から選抜して集めた軍歴豊富な下士官達も加わったとされる。彼らは昭和20年(1945)1月のフィリピン・リンガエン湾、同年4月の沖縄戦で米軍の艦船に突撃する作戦などに参戦し、その7割が戦死したと記録されている。しかし、戦死者の多くは戦地に赴く途中に米軍潜水艦の魚雷攻撃で輸送船が沈没したものによるともされている。この秘密部隊で訓練を終えた部隊員は、原爆投下時に幸の浦や深浦などで約1,500人在籍し、広島市民を救出するための出勤命令により、上陸用舟艇に分乗して被災者を救出する作業に従事している。

似島に残る旧軍用桟橋

似島検疫所は昭和33年（1958)、施設の老朽化もあって完全閉鎖され、敷地の一部が広島県戦災児教育所似島学園（現似島学園）となった他、平和養老館、広島市似島臨海少年自然の家、広島市立似島小学校及び似島中学校となっている。似島学園は昭和21年（1946）9月、戦災孤児や浮浪児を保護するための養護施設として開設され、戦後の窮迫した社会状況の中で養豚、養鶏、牡蠣の養殖などにより彼らを養育させながら、併設した学校で教育を授けた。似島学園は昭和27年（1952）に社会福祉法人となり、41年（1966）に知的障害者施設高等養護部を併設した。現在でも120人ほどの児童、生徒が在園している。学園創業者の森芳麿は、戦時中に広島市在住の日本体育協会職員をつとめたが、東京の本部出張中に広島に原爆投下があったことから、戦災孤児や浮浪児の救済に乗り出したもの。日本サッカー協会特別顧問森健兒、元サッカー日本代表監督森孝慈の実父でもある。

【似島の海運】

似島の海運業者は古くから、軍関係の船舶と陸地との間の艀作業に加えて、輸送船の安定度補強のための砂利積み込み作業に従事していた。似島と周辺海域では明治期から良質の真砂土と花崗岩が採掘され、その跡地が今も残されている。当時はまだ、現在のようなバラスト水による喫水調整が開発されておらず、固定バラストとして砂利を船底に積み込んでいた。似島住民は初め島内で、のちには周辺地域で適質の砂利を採取し、軍需物資のの輸送船やその他の艦船に、底荷として砂利を積み込んだ。似島で当時使用していた砂利採取船は、10～15㌧の木造2本柱の帆掛け船で、1艘あたり8～10㎥の砂利を積んだ。昭和の初期頃にはこうした木造船が70艘ほどが似島で使われていた。これらの船は広島市街地への「真砂土」運搬にも利用された。真砂土とは砂が半ば混入しているもので、似島の山から採取し主に家屋の壁土として、また当時舗装されていなかった幹線道路の表土として需要が大きかった。特に「高貴な」人物が広島を訪れる際には、道路上に新しく厚さ6㎝の真砂土を敷きつめたと伝わっている。

似島にはこの頃これらの帆船の他、主として市街地への往来用として、手押しの櫓を備えた和船も10数艘あった。農漁業生産物はこの和船で江波港（広島市中区）へ揚げ、そこから榎町（広島市中区）にあった市場へ荷馬車を用いて運搬した。また、満潮の時には船のまま直接、川を遡って市場へ荷揚げしたという。

木造帆船は、昭和10年（1935）頃から焼玉エンジン付きに改造された。これは2サイクルの発動機で、能力向上によって砂利を12㎥まで積載することが出来るようになった。その後、砂利運搬船は次第に大型化したが、それでも戦後10年間は100㌧未満の木造船が使用された。船には足踏み式の起重機を備えつけ、砂利を積み降ろしていた。作業も航海も家族単位で夫婦、兄弟、父子あるいは親戚関係の男達が乗り組んで、仕事をするのが習いとなっていた。

昭和30年代に入ると木造船は順次、鋼鉄船に代替された。建造された鋼船は大部分が200総ﾄﾝ未満であったが、これは法規による乗組員数の規定と関わりが深い。折りからこの頃、水島工業地帯の造成や福山市へ日本鋼管を誘致するための埋め立て工事があり、大量かつ長期にわたる土砂の需要を生じ、似島の海運業が急速に拡大成長を遂げたのだった。

似島沖で稼働する砂利船

船の建造資金は戦後、能美島の中村や切串などに住む裕福な農民からの融資に頼ったという。その後、新造船の建造費は当初頭金を支払い、残額を延べ払いにする方法が一般的となり、頭金の融資は不動産を担保として金融機関や商社金融に頼ったが、同時に島内住民達の相互扶助機構としての頼母子講の役割も大きかったようだ。また、似島で長い伝統を保ち終戦直後には盛況を誇っていた農業が海運業の振興する一方で衰退し、農業者機関としての農協が地元海運業振興に大きく貢献したのだった。昭和53年（1978）当時の似島農業協同組合の融資順位は、船舶建造関連が第1位を占め、次いで住宅貸付、農業資金は第3位にとどまっていたとされる。

似島での鋼船の建造は昭和30年代末が最盛期で、一時は似島住民の保有した砂利船は230隻余りに達した。似島の砂利船は元々、出稼ぎによる就業が多かったが、地元の砂が枯渇して来ると、就業先が初めは山口県下の採取場だったのが次第に全国に広がるようになり、特に北九州の戸畑と関東の木更津を目指すようになった。しかし、昭和50年代後半からの景気回復による東京湾での大型工事が長期化したことに伴い、木更津に根拠地を変える船主が多くみられるようになった。一方、この頃から広島県の環境保護規制も厳しくなり、砂利採取地の制限を受けるようになったため、地元を基盤としていた似島の砂利船も次第に就業先を東京湾に求め、木更津周辺地区に家族単位で定住する者が急増した。その結果、似島町の人口は減少に拍車をかけ、急激な過疎化を招くこととなり、町の運営は勿論、地域社会活動や学校教育までも支障を来すようになった。これは、似島住民の大半が砂利船で生計を立てているからに他ならなかった。似島の砂利船は戦後、土木建設用の海上で採取して輸送することが主体だったが、現在では九州や広島地区で就業する多くが石灰石の採石を生コンや骨材用に、陸上から積んで陸上に揚げる輸送する仕事に携わっている。

収益性を求める砂利船が大型化を図ったのも昭和50年以降で、戸畑地区就航船砂利船でも大型化によって隻数を減らした。現在の組合所属船は稼働率のよい499総ﾄﾝ型が主体だが、749総ﾄﾝ型では土場の広さからみて大き過ぎるという。最近、全国的に砂利船のガット士不足が深刻になっているが、似島地区では自社でガット士を養成することが伝統的に確立されているせいか、目立った不足傾向はみられない。

以前から船乗りは盆や正月に家族単位で帰郷していたが、似島では砂利船の他地域での定住が長期化するにつれてそれが減少している。今後、この傾向は益々強まると考えられ、似島の伝統文化の維持さえ困難になっていくことが懸念される。

似島港の桟橋前にある胡子神社

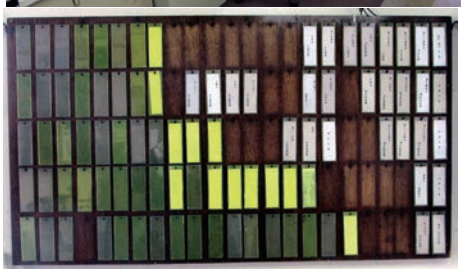
【組合の活動】

似島地区海運組合は、昭利18年（1943）1月に設立された似島地区機帆船事業協同組合が前身。第2次世界大戦の終戦直後には徴用から戻った船腹が60数隻あったか、2隻

を残し売船するなど加盟船腹が皆無に近い時期もあった。戦後復興期には、組合員が1人当たり当時の資金で100円を拠出し、島の波止場を築造したというエピソードもあり、地元の復興も担っていた。

その後は組合も活気を取り戻し、昭和30年代からガット船建造がラッシュをみせた。ガット船の開発は終戦後のアメリカの技術や広島・呉の海軍の技術を参考に、昭和35年（1960）頃から現在のガット船が建造されている。最初は木船にデリックを積み、発動機を搭載したものだったが、このガット船の出現により木船から鋼船化と大型化が進み、急激に船腹量も増加して行った。似島はガット船の発祥地としても名を上げている。

似島では、昭和38年（1963）2月に機帆船組合を改組し、現在の似島地区海運組合を設立した。昭和44年（1969）10月には、内航2法制定による船主経営強化のため、似島のガット船の船主で構成する似島内航海運協業細合（2号運送業）を海運組合内に併設している。実質的な運送業務はないが、日本一の規模を誇るガット船の運送業者だった。現在では協業組合が解散し、海運組合だけになっているが、その頃の名残で組合所属船の地区別就航ボードが似島地区海運組合事務局の壁に掲げられている。



（上から）**似島地区海運組合の建物、事務局、所属船の地区別就航ボード**

似島へは、宇品港から1時間に1便の連絡船である似島汽船のフェリーで約20分。運賃は大人1名450円、子供150円。似島港の桟橋を上がると目の前に石鳥居があり、胡子（えびす）神社の小さな祠がある。この神社の正面を右折すると右手に3階建ての似島公民館、広島市南区役所似島出張所、似島集会所、診療支所、広島南消防署似島出張所を併設した複合施設の似島合同庁舎が建ち、その向かいの路地を左折して、50mほど進んだ左側の2階建ての1階に似島地区海運組合の事務局がある。この付近が似島の繁華街だという。廣延専務理事は宇品からフェリーで通勤している。組合事務局長は地方運輸局出身者の順送りが多いが、廣延専務理事は海上保安庁出身ながら、似島地区海運組合の事務局長募集を聞きつけて自ら問い合わせて就任している。

似島には信号もバスやタクシーもないので、島内を巡るには本土からレンタカーでフェリーを利用する以外にないが、道路が狭い上にくねっているので、慣れないと運転には注意が必要だ。取材当日は、吉本理事長自らが宇品から運転して来た乗用車で島内を案内いただいたので助かった。似島地区海運組合の所属組合員は皆、吉本理事長同様に宇品に会社や自宅を構えながらも、島にも自宅を持ち盆暮や法事などに戻っている。現在、組合員17社中の6社が宇品に拠点を構えている。年4回開催の理事会（理事6名）や、組合員が帰省する毎年1月2日に開催される総会も組合事務所で開催されている。

似島地区では他の広島県下の船主同様廿日市市宮島にある厳島神社（「広島県内航海運組合」編参照）を航海安全の守護神としている。

【参考文献】『似島の口伝と史実』（似島郷土史編纂委員会刊）